

## 第 5 回講義 (20120601)

## § 4 同一性言明の意味について (続き)

## 【余談】

・ルソーは『言語起源論』において、言語の起源は歌であるという。つまり最初の言語は歌であったという。ルソーもまた西田定規さんとうように「安全保障の言語」が言語の始まりだ、と考えているのだろうか(ルソーの読み直しの必要があります)。では歌の起源は何だろうか。最初の歌はどのようなものだったのだろうか。言語と同時に歌が登場したのだろうか。それとも言語がないときにも歌があったのだろうか。もし後者だとすると、それは声による音楽であろう。では、音楽の起源は何だろうか。

・鳥や犬が、音楽を流して喜ぶかどうかは、脳波を調べればわかるだろうか？音楽を聞くときの脳波の変化がわかったとして、喜んでいるかどうかは、どうしたらわかるだろうか？

・もしチンパンジーが声あるいは仕草であいさつをすれば、相互覚知があることの証拠になるであろう。もし挨拶をしないとしても、相互覚知がないことの十分な証拠にはならない。もし毎朝、人間がチンパンジーに手を上げて「アー」と声を上げて挨拶することを繰り返していれば、チンパンジーもエコイックにそれを返してくるようになるのだろうか？

## 【前回の復習】

## 1 同一性条件意味論の説明

次の主張を「同一性条件意味論」と呼ぶことにしたい。

「 $A=B$ 」(の意味)を理解するとは、「A」と「B」の同一性条件を理解することである。

言い換えると、同一性言明の意味は、その同一性条件である。

問い「それでは同一性条件とは、何だろうか？」

同一性条件とは、「同一性が成り立つ条件」あるいは「同一性ないし非同一性が成り立つ条件」であろう。

問い「同一性条件を理解するとは、どういうことだろうか？」

## ■同一性言明の同一性／非同一性が成り立つ場合の分類

(1)「A」の指示対象と「B」の指示対象が同一／非同一である

(a) 意味だけからそれがわかる場合 「彼の父の妻＝彼の母」／「彼の父の妻≠彼の父の父」

(b) 意味と事実によってそれがわかる場合 「クサンチッペ＝ソクラテスの妻」／「クサンチッペ≠プラトンの妻」

(2)「A」の指示対象と「B」の指示対象が存在しない場合。

この場合には、同一性／非同一性は、意味だけに基づく。

問い

「私たちは、(1)「A」の指示対象と「B」の指示対象が同一／非同一である場合を、次の2つに分けた。

(a) 意味だけからそれがわかる場合

(b) 意味と事実によってそれがわかる場合

しかし、この二つが明確に分けられないということが、クワインの主張であった。

クワインのその議論は、同一性言明の場合にも妥当するのだろうか？」

## ■クワインの「二つのドグマ」の紹介

## 【ここまでが復習】

## 2、クワインの議論の吟味

(1)クワインの議論からの帰結 1 同一性関係の特殊性

クワインならば、上記の(a)「意味だけから真であるとわかる同一性言明」(これは分析的真理に対応する言明である)を、次の2つに分けるだろう。

- ①論理的に真である同一性言明 「独身者=独身者」
- ②意味によって真である同一性言明 「独身者=結婚していない男」

クワインは、この2つが「分析的真である」のは、ともに「意味論的規則によって真である」とするアプローチを検討する。その場合に、私たちは、「意味論的規則によって真」である場合を、①と②に対応する仕方次第で次の2つに分けることができるようにみえる。

- (a) 論理定項と量子子の意味論的規則によって、真である。  
例えば、「 $p \rightarrow p$ 」は論理的真である。
- (b) 個体定項と述語定項の意味の規約によって、真である。

たしかに、①は同一性記号「=」の意味だけにに基づいているのだが、同一性関係は二項述語の一種である。したがって、(b)に属する。ただしそれは、「 $Fxy = 「xはyの父である」$ 」のような経験的な二項述語ではない。同一性記号は、反射性、対称性、推移性がすべての個体について成り立つ、非常に特殊な二項述語である。(a)は文と文を結合して出来る文である。同一性言明が論理的真であるとしても、現代論理学の記法では「二義的」(?)である。(a)にあたらないうが、伝統的には、論理的に真であるとみなされてきた命題に、次のものがある。

同一律、矛盾律、排中律

反射的  $a=a$

対称的  $a=b \rightarrow b=a$

推移的  $(a=b \ \& \ b=c) \rightarrow a=c$

	反射的	対称的	推移的
$a < b$	x(不可能)	x(不可能)	○
$a \leq b$	○	x(可能)	○
aとbは兄弟である。	x(不可能)	○	x(*可能)
aとbは友人である	x(不可能)	○	x(可能)
aとbは同じ言語を話す	○	○	x(可能)
aは自分を愛するのと同じだけbを愛する	○	x(可能)	x(可能)

\* 対称性  $a=b \rightarrow b=a$  と 推移性  $(a=b \ \& \ b=c) \rightarrow a=c$  が成り立つならば、反射性が成り立つ  
しかし、兄弟は、反射的でない。ゆえに、兄弟は、推移性が成り立たない。

■クワインの帰結への反論の試み1: 同一律だけが意味論的規則であるとする

何が意味的規則であるかは、クワインの言うように言語に相対的である。では、意味論的規則として、同一律だけを考えると、「同一律は分析的に真である」と規約すればどうだろうか。

これに対してクワインならば、「何が同一律であるかもまた言語によって相対的である」と言うだろう。

■クワインの帰結への反論の試み2: 同一律とタイプ/トークンの区別

$A=A$ が成り立つことは、タイプとトークンの違いを受け入れるならば、受け入れている。

<もし「 $A=A$ 」のなかの「A」と「A」が同一タイプに属する異なるトークンであるならば、「 $A=A$ 」が成り立つ>

タイプ(eg. 「x」)とトークン(eg. 「x」)の区別は、言語の成立の基本前提である。ゆえに、あらゆる言語において、同一律(eg. 「 $x=x$ 」)は成り立つことになる。

このことは、問答において明示的になる。「AはBですか?」と問われて、「AはBだろうか」と考えるとき、答えようとするものは、与えられた問いを考えているつもりである。つまり、問の中の「A」と、それを受けて「AはBだろうか」と考えるときの「A」は同一であると考えている。現地人が「ガバガイ」というのを聞いて、うさぎが見えた時に「ガバがい?」と問う野外

言語学者は、現地人のいう「ガバガイ」と彼女が尋ねた「ガヴァガイ」が同一であると考えている。問答が可能であるためには、あいタイプの表現についてのトークンが繰り返される必要がある。そして、それらのトークンが同じ意味を持つと考えているので、「A=A」や「ガヴァガイ=ガバヴァイ」が成り立つと考えている。

これに対してクワインならば、次のように言うかもしれない。しかし、2つの発声が、同じタイプの発声であるかどうか(あるいは、2つの発声を、同じタイプの発声とみなすかどうか)は、言語に依存する経験的な事実である。そうだとすると「A=A」が成り立つかどうかもまた、言語に属する経験的な事実である。

#### ■私的言語とタイプ/トークン関係

ワイトゲンシュタインは私的言語の不可能性を主張したとされている。彼の私的言語批判がどのようなものであるかについては、議論があるが、ここではつぎのような私的言語批判の論証を受け入れて議論したい。

- ①言語は、言語ゲームの規則(語の使用の規則)をもつ。(前提)
- ②私的言語とはある一人の人だけが理解している言語である。(前提)
- ③私的言語では、<規則に従っていること>と<規則に従っていると信じていること>の区別ができない(②からの帰結)
- ④①と③は矛盾する

ここから③の前提である②の否定が帰結する。

私的言語では、<規則に従っていること>と<規則に従っていると信じていること>の区別ができない。もうすこし具体的に説明しよう。ある人が、ある痛みを感じた時にカレンダーに「E」と書き込むとする。彼が、その痛みを感じた時にまた「E」と書き込んだとしよう。このとき、この2つの「E」はある種類の痛みを表現するタイプ「E」の2つのトークンである。このとき、「E」は規則に従って、使用されているといえる。

このとき成立していなければならないことは次の二点である。

- ①2つの書き込み「E」が同一タイプの表現の2つのトークンであること
- ②2つの書き込み「E」が指示する対象(指示すると信じられている対象)が同種の対象(「似たような痛み」)であること

①についても②についても、私的な言語の場合には、それが<成り立つこと>と<成り立つと信じていること>の区別ができない。

①が成り立たなければ、言語ゲームが成立しない。

ゆえに、その対偶<言語ゲームが成立するならば、①は成り立つ>が成り立つ。

ところで、①が成り立つならば、「E=E」がなりたつ。

#### ■クワインの議論の曖昧な点:「経験的な事実であること」の多義性

- ①辞書編纂者が、語「痛い」の意味を言語使用の事例調査から記述する。これは規約ではない。
  - ②辞書の正しさを承認するとき、それは規約になるのだろうか。
  - ③「言語における意味論的規則」の意味は個々の言語に依存する経験的な事実である。
  - ④もし言語に依存しないしかたで規則の内容を決めることができ、しかも、それを規約としてみとめたとすると、その場合にもその規約に基づく真理は、経験的な真理なのか?
  - ⑤もし、実在的な真理をみとめず、認識された真理だけが真理であるとする時、すべての真理は経験的な真理なのか。そうではない。常に確証される真理とそうではない真理の区別をすることができる。
- しかし、<ある真理が、このどちらであるか>が、客観的に定まっているのではなくて、認識された時にだけ定まるのだとすると、この区別もまた認識に基づくことになる。
- ⑥規約による真理は、常に確証される真理なのか?
  - ④2つの発声が同じタイプの語や文であるかどうかは、言語に依存する経験的な事実である。

①～④は、経験的な真理なのか、分析的な真理なのか?

#### ■クワインの議論への反論の試み3:意味の全体論は確かか?

不可分離性から、意味の全体論が帰結するのだろうか?

不可分離性から、個々の文の意味が確定できず、それが少なくとも他の多くの文の意味に依存することは帰結する。しかし、そこから意味の全体論は、帰結しないのではないか。むしろ、言語の全体にまで拡張したとしても、文の意味は原理的には確定しないことが帰結するのではないのか。